

語

ら

い

座

レポート

第6回 語らい座

「香という旅」

ゲスト

蜂谷 宗苾 氏

志野流香道二十一代目家元継承者
池坊短期大学非常勤講師
文化庁文化交流使

平成21年9月7日（月）

株式会社大央 大央ホール



座長レポート

長い時間をかけてつくられる香木、長い時間をへて継承されてきた香道。そのちからのおかげで、わたしたちの想像はひろがり、なつかしい場所や未知の国に旅をするこ
とができた。
香を聞き、その心を共有した時間は、かけがえのない記憶として参加者に刻まれたの
ではないかと思う。日本人としてのよろこびと誇りに満たされた晩であった。

座長 松岡 恭子（建築家）

不動産会社大央の情報発信スペース「大央ホール」で開催された「語らい座」の第6回目。座長である建築家松岡恭子氏が今回迎えたゲストは、室町時代より二十代、五百年に亘り香道を継承し続けてきた志野流の二十一代目家元継承者蜂谷宗苾氏。全国教場、文化センター及び海外教場等での教授、大学での講演を開催し、海外を含めた各地で啓蒙活動を行う傍ら、稀少になった「香木」を後世に残していくためベトナムでの植林活動、それに準ずるエコ活動を「環境道」と題し講演活動にも尽力を注がれている。

「香という旅」という言葉にふさわしく季節は初秋、旅の案内人蜂谷氏は袴による和装で身をまとい、立位でゆっくり語り出した。

蜂谷氏「香りは嗅ぐのではなく聞いてください。魂の奥底まで染み込ませて会話を楽しむのです。」

冒頭に語られたこの言葉は、あとの香木・香道の長い歴史を聞くと非常に良く理解できる。雑念を捨てて無心となり、研ぎ澄まされた精神で香木と対峙することは、香道の世界観そして自己を見つめなおすきっかけともなった。

■香道への誘い

香木は東南アジアでしか採れない。自然界が付けた表皮の傷から入るバクテリアを樹木が防御する際の働きにより香木が生まれるのだそうだ。まさに偶然が惹き起こす産物である。それが海を渡り初めて日本にたどり着いたのが、推古天皇の奈良時代、淡路島に漂着した流木が始まり。

蜂谷氏「淡路島に漂着した流木を燃やすと非常に良い香りを発したため急いで朝廷へ献上したのです。流木は香木として扱われ、一部は聖徳太子により仏像として納められました。夢殿の観音様がそうだとされていますが真偽のほどは定かではありません。この香木は「法隆寺」と名付けられ、残りは大切に保管されています。」

長い年月保管されている日本初めての香木は、私達を様々な思いに馳せてくれる。時期同じくして仏教が広く伝わる中で、香木はお清めの儀式に使われ始める。お線香などもその流れで、神仏と香りのかかわりは深くなっていった。

平安時代に入ると、香木は宗教儀式のみならず、貴族の中でも重宝されるようになっていく。

蜂谷氏「平安貴族は香木を含めた様々な香料を調合して自分に合う香りを自分でつくっていたのです。異性を惹きつける目的であったり、人に会うためのたしなみであったり。調合するためにはたくさん勉強して教養を身につけなければ出来なかった。」

源氏物語に出てくる香りにまつわる話は数多く、光源氏の「残り香」について蜂谷氏は続ける。

蜂谷氏「すれ違いで出て行った女性の残り香を通して切なくなる、日本人の感性は香りとともに表現され、また風に運ばれてくる香りを通して見えないことを思い巡らすことも出来たのです。」

鎌倉時代に入り、仏教の中でも禅という考えが中国から入ってくる。蜂谷氏自身も禅寺での修行を積み、人間本来の五感がよみがえることを体感したと語る。そんな蜂谷氏の言葉から我々がいかに「忙しさ」の中で多くのものを見失ったのかが伝わってきた。

蜂谷氏「冬の朝、何となく外が気になり障子を開けてみると、しんと降る雪で一面雪化粧だった。」

自然の中に身を置くことで、五感を超える感覚も研ぎ澄まされてくると、蜂谷氏は語る。

時代は室町時代へと移る中で、香りは平安時代と違い、香木一つに価値を見出す時代となっていた。その中では香木一つ一つに名前を付けていく行為も行われていく。

蜂谷氏「香りに名前を付けることは非常に難しい。名前は和歌から引用し、五味（甘い、辛い、酸い、苦い、鹹い）で表現する。春夏秋冬、朝昼晩、何度も何度も香りを聞き名前を付けるのです。それは常に最高のコンディションで聞かなければならないです。」

語り口からただならぬ体調管理、精神管理であることが伝わってくる。香木になるも、名前が付くも非常に長い年月と時間がかかるのだ。

蜂谷氏「現代は五感の中でも嗅覚の重要性を忘れつつある。元来動物は危険回避のために嗅覚が発達していたが、平穏な生活を送る中で必要性が薄れてきたからでしょう。人口的な香りも衰退の要因かもしれない。私達は香りを聞き分けるときは精神、体調全てにおいて研ぎ澄まさなければなりません。」

室町幕府時代8代将軍足利義政は今のあらゆる「道」そしてわび・さびに通じる美意識が広まる東山文化を築く。初代志野流家元志野宗信はまさにその時代に香道を極めた。茶道では村田珠光が「わび茶」を確立した時代でもある。

時代は進み戦国時代。生死をかけるこの時代は、甲冑に香木を忍ばせ、血生臭い戦場で心を鎮めるために用いた。江戸時代に入ると、町民や一部農民にも香道が広く伝わり、出島に入る香木は、藩で取り合いになるほどであった。広く親しまれる様になるということは、香木が多く消費されることでもある。現在香木は世界で大量に消費されてきている。志野流現家元蜂谷宗玄氏は二十代の家元で初めて現地（ベトナム）に出向き植林を行った。千本植えて何本できるかどうかの世界だが、蜂谷氏もその重要性を強く語る。



香道の歴史を話される蜂谷氏

蜂谷氏「大量消費の中で、人工的に香木をつくりだしている現実もある。しかし人の念が入った香木は明らかに香りが違うのです。」

時代と共に親しまれてきた香木の長い歴史の中で、一つ有名な香木が紹介された。宮内庁が管理する「蘭奢待」（らんじゃたい）。3つ切り取られた後があり、切り取ったのは、足利義政、織田信長、明治天皇。貴重である香木は歴史そのものとも言え、決して香りのみの話ではないのだ。その貴重な香木の一つ、「防人」を蜂谷氏が見せてくれた。ここ福岡にも縁がある名の付いたその小さな木のかげらからは、そこはかたなく防人を案じる家族の思いが聞こえてくるようだった。

蜂谷氏「我々は決して香木を粗末に扱いません。大切に扱い、ある程度の大きさになればそれを使わず後世に残すのです。」



蘭奢待の写真と蜂谷氏

■ 香道と一期一会

松岡氏「香道は人と人をつなげることを数多くつくってきたと思います。それも一度きりの出会いであったり、その瞬間であったり。そのようなつながりの話を聞かせてください。」

蜂谷氏「香木が持つ香りを引き出すのは非常に難しいことで、火加減一つでも香りが変わるので。その日の天気や環境も大きく影響するし、香木自体の性格もある。その最高の瞬間を強すぎず弱すぎず、引き出さなければならないのです。そうやって聞く香りには出会いもあります。以前、伊達政宗が所持した名香「柴船」を聞く会があったのですが、政宗が聞いた香りだと思ふとまさにそこに政宗がいるような気にもなるのです。」

松岡氏「香りを使った遊びがありますが、詳しくお聞かせ願えますか。」

蜂谷氏「香りが違う幾つかの香りを持ち寄り、その香りを聞き当てるという遊びです。ただ当てるだけでなく想像力が大事な遊びです。例えば、日本三景というテーマで遊ぶ場合、3つの香りを「松島」「橋立」「厳島」と名付けます。そしてその香りを覚えるのです。それに「舟」というもう一つの香りを追加し、シャッフルしてどれがどの香りかを当てるわけです。想像力が大事なものは、「松島」の香りを聞いているときは、あたかも松島にいるかのようなイメージーションを膨らますことが必要で、そうすることで深く香りを理解し、楽しむことが出来るのです。」



対談中の蜂谷氏と松岡氏

松岡氏「そのときに当てた数に合わせて、名前を付けるのも面白いですよ。」

蜂谷氏「そうですね。例えば一つしか当たらなかった人は、他の景色を見ることができなかったということで、「夕霧」と名前がつけられます。二つ当てた場合は「朝霧」、全て当てた方は「三景」というように名前をつけて表現します。全て間違った場合はなにも見ることができなかったということで「雲霧」という表現をしたりします。視界を遮られ何も見ることが出来なかったのではありません。面白いのは、「舟」だけ当てた場合、旅はしたけどまったく違う景色を見ていたということで、「眺望」と付けたりして楽しむのです。大事なのは、満点を取ることではないのです。無心になって香りを聞くことが大事、そして香木への感謝の気持ちも忘れてはいけません。」

松岡氏「会の記録も残るそうですね。」

蜂谷氏「大事な記録として表装されることもあります。500年前の正宗の記録もあるほどで、その会の出席者や日付、場所、携わった方々の名前まで記録され、誰と誰とが交流があったかなどもわかるのです。歴史の記録としても大切なものですね。」

松岡氏「言葉で無く香りを介してなされてきた出会いですね。」

蜂谷氏「会では一切会話は無いし、感想も述べてはいけない。あくまで自分自身が何を思い考え感じたのかを、香りを介して知ることが重要なのです。」

松岡氏「数百年という時をかけてできる香木を、交易を通し扱っていたのは日本だけなのでしょうか。」

蜂谷氏「仏教圏は香りの文化があります。香港などはスパイスも含め香りの交易の中心でした。」

松岡氏「仏教と言ってもお線香とは違う。こういう親しみ方は日本だけでしょうか。」

蜂谷氏「香道は、和歌や書の嗜み、自然界への理解、そして何よりも香木を手に入れることなど、広く様々なことと絡み合っていて出来ているのです。そう考えると日本特有なのかもしれませんね。」

松岡氏「そこに日本らしさを感じますね。あるものを即物的に楽しむだけではなく、様々な思いをめぐらせ、想像し、風情や和歌を引用したりしながら旅をし、自分を問い直す。そしてその場に居合わせた人とその時間を楽しむことが出来る。そういう日本の文化そして日本人の心を非常に誇りに思いますね。」

一聞きの香りから育まれてきた日本文化の奥深さにもう一度、私達は目を向けるべき時代に来ているのではないだろうか。

■香道・志野流のこれから

松岡氏「この9月から文化庁よりヨーロッパに派遣されることとなる蜂谷氏ですが、この様々な文化の背景と絡み合っている香道を世界に広める難しさは計り知れません。それに立ち向かっている蜂谷氏そして志野流香道の21世紀はどのようにお考えでしょうか。」

蜂谷氏「積み木を積み重ねるように二十人の家元が積み重ねてきたそれぞれの役割がある。私もまた次を積み重ねる必要がある。世界が日本文化を注目している動きに応えることが、私の使命の一つなのだと感じています。また、難しく作法ばかりにもならず、香りを聞く本質をきちんと伝えていくことが重要なのだと考えています。そうすれば作法は自ずと身につくはずで。私にも香道のまだ知らない扉がある。その扉の向こうにはまた違う扉が無数にある。それを一つずつ開けていくことが今の私の仕事なのでしょう。」

20人の香道の先代と常に会話をしているとも蜂谷氏は語る。受け継がれるバトンの重責は計り知れないが、一つ一つ目の前の扉を開けていくと語る蜂谷氏の信念からは明瞭で清らかな心が伝わってくる。これからの志野流の旅がすでに始まっているのだろう。

松岡氏「香木の長い長い旅を一瞬に味わうことができる香道を蜂谷氏が新たな旅を始めているように、我々もまた今日この瞬間から、新たな旅路に入ったように思いますがいかがでしょうか。」

対談の締めくくりに、蜂谷氏が二つの香りを聞かせてくれた。作法を重んじる志野流だが、今日は丁寧に説明を交えながら香りを聞く準備を進められた。その一手間一手間が美しく、見ている我々の集中力が高まっていく。二つの違いを聞いてほしいという蜂谷氏の思いがそこから伝わってきた。



香りを聞く準備をされる蜂谷氏